

琉球方言におけるワ行子音の変遷

—「斎場御獄」の事例から—

新垣公弥子

はじめに

本稿は「琉球方言におけるワ行子音の変遷 —「保栄茂」の事例から—」（『沖縄学』第12号）の姉妹原稿である。

これまで筆者は琉球方言のワ行子音の変遷についていくつかの考察を試みた。概略すれば、次のように述べられる。宮古・八重山方言に見られるb音と沖縄本島に見られる?やg w音を一連の流れとして考察してきた。前出の「琉球方言におけるワ行子音の変遷 —「保栄茂」の事例から—」（『沖縄学』第12号 2009）では、特に沖縄本島の地名に見られる事例を基に、沖縄本島方言にもワ行子音に対応するb音が存在し、その変化の過程での残存が「bia」（保栄茂）であることを述べた。ただ、これだけの資料をもって沖縄本島方言のワ行子音もかつてはb音であったと結論付けるのは早計である。そこで、本稿は前出の「琉球方言におけるワ行子音の変遷 —「保栄茂」の事例から—」（『沖縄学』第12号 2009）の姉妹原稿というべき形式を取りながら「斎場御獄」について考察をする。

まず本論に入る前に「斎場御獄」について概観しておく。沖縄全域には、集落や航海の無事を見守る神などが祭られている聖地が多く見られる。これらは「御獄（うたぎ）」と呼ばれている。その中でも「斎場御獄（せーふぁーうたぎ）」は、琉球王国で最も格式の高い聖地とされていた。琉球王国時代、斎場御獄では、神女でもっとも位の高い聞得大君（きこえおおきみ）の就任儀式「お新下り（おあらおり）」や、国の五穀豊穰、平和を願い、国王自らがお参りする「東御廻り（あがりうまい）」など、国の大切な神事が行われていた。当時は国王や聞得大君などのごく限られた人しか入ることができなかったが、現在では一般にも開放され「拝み」をする人が絶えず訪れる御獄である。

その「斎場御獄」は「せーふぁーうたぎ」のように発音される。これを音声字母で記すならば[se:ɸa:ʔutaki]となろうか。このことが「保栄茂」（びん）と同様、沖縄本島にもワ行子音に対応する音声にb音が存在したことの傍証になるであろう

うことは後述する。

以下、これまでの研究の流れについて述べていく。

琉球におけるいくつかの地域でワ行子音にb音が対応することはよく知られている。その多くは宮古・八重山地域に集中していることも先行研究が示す通りである。琉球方言におけるワ行子音b音についての関係を解明しようと試みたのは村山七郎(1981)『琉球語の秘密』と名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』である。しかし、その両者はまったく相反する結論を導き出している。両者の論を概観すると、村山(1981)は(w>b)、名嘉真(1992)は(b>w)と結論づけている。その両者の論の展開をみると、どちらも正しいワ行子音の変化の流れを論じているように思われる。しかしながら導き出された結果はまるで相反するものとなっている。これはどうしてなのか。この問題について筆者は取り組んできた。新垣(1998)では一連の流れで前述の両者の論を説明した。しかしそれだけでは不十分として内間(2004)が提出され、琉球方言のワ行子音の成立に関してさらに踏み込んだ見解を示した。

これを承けて新垣(2009)では、内間(2004)の検証も兼ねて、これまでのワ行子音の研究を順を追って観察しながら、琉球方言におけるワ行子音の成立について考察したい。まずはじめにワ行子音についての先行研究を年代順に示す。

[ワ行子音の記述研究]

- 1) 仲宗根政善(1934)「國頭方言の音韻」『方言』第4巻第10号 春陽堂
- 2) 平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』東京堂
- 3) 野原三義(1983)「沖縄県国頭村辺野喜方言の助詞」『琉球の方言8』法政沖縄文化研究所
- 4) 中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 5) 法政大学沖縄文化研究所(1977)『琉球の方言 宮古大神島』
- 6) 中本正智(1981)『図説琉球語辞典』金鶏社
- 7) 琉球大学方言クラブ(1991)「辺野喜方言の音韻体系」琉球大学方言クラブ

[ワ行子音の分析]

- 8) 村山七郎(1981)『琉球語の秘密』筑摩書房
- 9) 名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』第一書房
- 10) 新垣公弥子(1998)「辺野喜方言におけるワ行子音の構造」『国語学会平成10年度秋季大会発表予稿集』国語学会(於:九州大学)

11) 内間直仁 (2004) 「ワ行古代日本語の子音の[b]音化について」『国語学』第55巻2号 日本語学会

12) 新垣公弥子 (2009) 「琉球方言におけるワ行子音の変遷」『沖縄学』第12号 沖縄学研究所
 筆者が研究を始めた頃には1)から10)までの研究があった。1)から7)までは記述研究であり、8)9)では琉球方言のワ行子音についての分析があった。しかし、その双方の検証結果は、まったく相反するものであった。個々にその研究結果を読み進めるとどちらも諸用例をあげながら、用例に基づく考察をしワ行子音の変化の流れを説明している。しかしその両方が異なる研究結果を示すのであるが、それはなぜか。

以下先行研究にみられるワ行子音変遷を概略示す。

表 1

諸 説	変遷過程				
村山説 1981	w > b (八重山方言)				
	w > p > b (宮古大神島方言)				
名嘉真説 1992	b > w (宮古方言)				
新垣説 1998	b (先島・奥・辺野喜) ———— <table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">g w (奥・辺野喜)</td> <td rowspan="2" style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">g (久高・花良治)</td> </tr> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">w (中央語)</td> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 5px;">w (沖縄方言全域)</td> </tr> </table>	g w (奥・辺野喜)	g (久高・花良治)	w (中央語)	w (沖縄方言全域)
g w (奥・辺野喜)	g (久高・花良治)				
w (中央語)		w (沖縄方言全域)			
内間説 2004	w > b (宮古・八重山)				
	w > b、g w、g > w (沖縄本島)				

琉球方言におけるワ行子音の変遷について、諸説の概要を示すと上記のようになる。

以下、諸説の概要を紹介し、比較検討を進めながら、琉球方言におけるワ行子音の変遷について考察を深めたい。

1. 村山説

村山(1981)では琉球方言のワ行子音に対して2つの変遷のパターンを示している。1つは八重山方言について、2つ目は宮古大神島方言についてである。以下、村山説について概略示す。

1. 1 村山説における八重山のワ行子音の変遷 (w>b)

村山はその著書『琉球語の秘密』の、第四章 琉球語における日本語のワ行音とヤ行音の対応 (p.67) の中で、宮良(1930)による八重山方言の例を引用して次のように述べている。

宮良当壮 (1930年 p.5) の八重山方言資料によると、日本語や沖縄本島首里方言のワ行音は八重山ではバ行音になっている。

日本語	首里方言	八重山方言 (宮良当壮による)
wa (我)	waŋ	ba
wakafi (若し)	wakasaŋ	bagasa :ŋ
wakareru (別れる)	wakarijuŋ	bagariruŋ
waku (湧く)	waç <u>u</u> ŋ	baguŋ
wafi (鷺)	wafinutui	basī
wasureru (忘れる)	wasijuŋ	basīkiruŋ
wata (綿)	wata	bada
wataru (渡る)	watajuŋ	badaruŋ
wara (藁)	wara	bara
warau (笑う)	warajuŋ	ba : roŋ
waru (割る)	wajuŋ	baruŋ
wi (藺)	i :	bī :
wiru (居る.坐る)	uŋ	bīruŋ
wo (緒)	u :	bu :
woi (甥)	wi :	bu :
wobito (夫) >otto	utu	butu / budu

日本語のワ行がバ行としてあらわれる点は宮古群島の言語も同じである(たとえば「私」はban, 「若い」はbakaである)。

いったいw-とb-のうち、いずれが古いのか。

日本語単語のうちワ行子音をふくむものなかで、アルタイ的起源と見られるもののw-にアルタイ諸語のb-が対応する。

以上のように、村山(1981)は宮良の八重山方言の例と首里方言、日本語とを比較しながら、ワ行子音のw-とb-との新古関係を検証しようと試みている。さらにはアルタイ諸語に見られる関係を述べた後に、次のような結論に達している。

1. 2 村山説における宮古大神島のワ行子音の変遷 (w>p>b)

さらに村山(1981)では次のように述べている。

*w0pi「甥」はw0pito「夫」の*w0「男」と共通であり、それに、メヒ(姪)のヒと同じpiの接尾した語形と見られる。w0はオーストロネシア祖語*uran「人、男」(>*uhan>*uan>w0)に対応する。

これらの単語の場合、w-は本源的であり、それに対応する宮古、八重山方言のb-はw->b-の変化の結果と思われる。

そして、この派生的なb-は宮古諸島の大神島方言ではp-に変わっている(b->p- 『琉球の方言』1977 p.16による)。

日本語	大神島方言
wakai (若い)	pakakam
waki no shita (わきの下)	pakʃita
waki mizu (湧き水)	paksimiki
wasureru (忘れる)	passim
wataru (渡る)	pataim
ヲヒ (酔<エフ) wepi	pi:tuuī (酔っている)
ヲツト (夫) wɔ/tto	putu
ヲ (緒) wɔ	pu:

これらのばあい、宮古の大神島方言ではw->b->p- という変化があったのである。

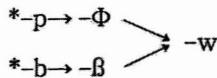
村山(1981)は以上のように述べている。この大神島にみられるワ行子音の[p]音化については重要な音声変化であると考えられ、中本(1981)では「藺草」「砂糖きび」といった2例の用例が[p]音となっている。琉球方言において「藺草」は「𦵏」に対応し、「砂糖きび」は「萩(ヲギ)」に対応する。これらの語が大神島

では[pigu] (蘭草)、[pu:kĩ] (荻) となって現れているのである。上記にあげた村山 (1981) の変化 (w->b->p-) が妥当であるか、否かについての検討は後述するが、ここで重要なことは、村山 (1981) では、すでに琉球方言のワ行子音の変遷といった大きな流れの中に[p]音が位置づけられている点である。

2. 名嘉真説

名嘉真(1992)では、琉球方言の特に宮古方言のハ行子音の変遷を考えるにあたり、ワ行子音と平行した音変化を考えている。ハ行とワ行とを平行的な音変化で捉えた点は体系の中で音変化が起こることを考えれば非常に重要であるといえよう。名嘉真(1992 p.17)では次のように述べられている。

一方、宮古のワ行子音b音も語中では、ka:rafu 《乾く》、ju:kan 《弱い》、ja:sikan 《ひもじい》、kui 《声》(例は西原)のようにbがあらわれない。この疑問はハ行転呼音と平行して、



と推定することも可能であろうが、しかしその場合でも、古代p音が保持されている宮古方言でなぜヤ行d音が保たれなかったのか疑問である。いずれにしても宮古のワ行b音、与那国のヤ行d音は、今後さらに検討する必要がある。

この部分で重要な点は、名嘉真(1992)がハ行転呼音と平行的にワ行子音の変遷を捉えている点である。(中略)以下87ページを引用する。

…3 ハ行転呼音

……(略)語中、語尾のハ行子音の変遷はどうであろうか。周知のとおり、国語の語頭以外のハ行子音は、平安時代に *p → Φ → w と変化した。いわゆるハ行転呼音である。

- *kapa (皮) → kaΦa → kawa
- *papi (灰) → ΦaΦi → Φawi → hai
- *kepu (今日) → keΦu → kewn → ken → kjo :
- *napai (苗) → nape → naΦe → nawa → nae

*fipo (潮) → fipɔ → fiwo → fio

この八行転呼音は琉球方言でも生じている。南琉球方言から前掲の六方言の例を示そう。

	長浜	西原	川平	黒島	竹富	祖納
《皮》	ka:	ka:	ka:	ka:	ka:	ka:
《灰》	paĩ	hai	pai	pai	pai	Higun
《今日》	kju:	kju:	kju:	kju:	kju:	su:
《苗》	nai	nai	nai	nai	nai	nai
《潮》	su:	su:	su:	su:	su:	su:

国語との相異はア段において、さらに変化してwを失うことである。いわば琉球方言の八行転呼音は唇音を完全に失う方向に進んでいる。

	長浜	西原	川平	黒島	竹富	祖納
《川》	ka:ra	ga:ra	ka:ra	ha:ra	ka:	kara
《縄》	na:	na:	na:	na:	na:	na:
《合わす》	a:si	a:si	a:sin	a:sun	a:sun	
《変わる》	ka:l	ka:i	ka:ruŋ	hawaruŋ	ka:ruŋ	kabaruŋ
《瓦》	ka:ra	ka:ra	ka:ra	ka:ra	ka:ra	ka:ra
《俵》	ta:ra	ta:ra	ta:ra	ta:ra	ta:ra	ta:ra

「変わる」を表す語で黒島と祖納で唇音を有するものの、やはり原則としてwを消失していることが分かる。しかし、一方では八行転呼しない語も見られ、成立上注目される。

	平良	長浜	西原	大浜	黒島	祖納
《大きい》	upukan	ukukan	uɸukan	maiSan	ubuhan	maisán
《柔らかい》	japakam	japakam	japakan	jaɸarasan	ja:rahan	daran
《美しい》	aparagkam	aparagkam	aparagkan	kaiSan	abarihan	abajan
《淡い》	apakam	apakam	apakan	aɸasan	—	aman
《固まる》	kupai	kupal	kupai	ko:run	—	—
《溢れる》	afuruii	afuril	afurii	abirun	—	—
《大根》	upuni	upuni	uɸuni	daikuni	—	ubuni

上の六方言の語例は、一部の語を除いて概ね「オホシ」「ヤハラシ」「アハレ」

「アハシ」「コハ-」「アフル」「オホネ」に相当するものである。一瞥して明らかのように、唇音を保持する形式が多く、これらの語がなぜ八行転呼しないのか問題である。もっとも、国語においても「ハハ(母)」「ホホ(頬)」「ホトホト(殆)」や「アヒル(家鴨)」などは、八行音で発音される。しかるに前者は一度八行転呼音した後に回帰した例であり、後者は八行転呼が終了した後に使用された語で、言わば八行転呼の影響を免れたものである。おそらく上の六方言の例は、この二つのいずれかの要因にも合致しないであろう。なぜなら、これらの語が過去に八行転呼した形跡はなく、また借用語とすることもできないからである。今のところ明らかではないが、国語の「アフル(溢)」「ハフリ(葬)」「ホフル(屠)」などの語は、古くは濁音であったことを考慮し、加えて黒島のubuhan《大きい》、abarihan《美しい》、大浜のabirun《溢れる》、祖内のabajan《美しい》、ubuni《大根》などは濁音で現れるので、

国語	祖語	琉球
nawa ← naΦa ←	*napa (縄)	→ naΦa → nawa → na:
aΦa ←	abu- ← *a ^m puru (溢)	↙ apu- → afu- (平良) ↘ abu- → abi- (大浜)

の変化を経た可能性がある。(中略)

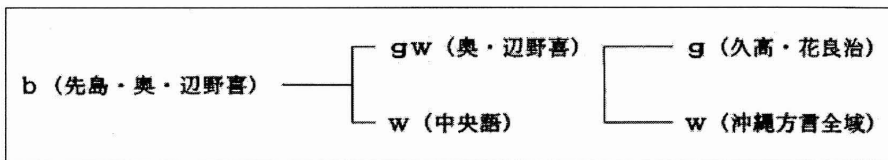
…今後は、南琉球方言に特徴的なワ行b音、ban《私》、buduI《踊る》、bI:《座る》、bikidum《男》と八行転呼音*p→Φ→wなどとの関係を明らかにし、問題のb音が日本祖語にさかのぼるのかどうか検討する。

以上のように述べられている。琉球方言のワ行子音八行子音の変化とともに示し、有声音と無声音との対立関係から[p]音と[b]音の変化を平行的に考察しようと試みている。またここで重要なのは「祖語」の(縄)を「*napa (縄)」としている点である。これは後述するが、非常に重要な指摘であると考えられる。

3. 新垣説(1998)

新垣(1998)では上記に示した両者の理論を踏まえ、合わせて辺野喜方言の事例から、次のようなワ行子音変遷の流れを示した。ここではこれまでの研究がb音がw音かの問題として考えられていたことを全琉球方言のワ行子音を網羅し一つ

の流れで示した点がこれまでの研究にはなかった視点である。今後の展開に重要であるので考察の過程を比較的詳しく述べていく。



まず/gw/音の対応関係をみていく。ワ行音を含む語彙を男女別、年代別に5人の話者宮城カマト氏(1906生)、山城ヨシ子氏(1917生)、東恩納寛正氏(1917生)、山城太栄氏(1927生)、山城マカ氏(1921生)氏から1996年から1997年の臨地調査で採取した資料である。詳細は内間・新垣(2000)を参照されたい。

辺野喜方言で/gw/を含む語は、ワ行音の「ワ」「ヲ」と「ガ」に対応することがわかった。このような対応関係が明らかになっているのは、辺野喜と隣接する宇嘉および奥で確認できた。ここでは辺野喜方言の/gw/についてみていく。

/gwa/は琉球方言の多くの地域で「ガ」に相当する音として現れる。例えば南部前島方言では[so:gwatʃi] (正月) のようになる。このような対応関係は、中央語における漢語音の影響によるものであると考えられる。つまり「ガ」に相当する/gwa/は音そのものの内部変化(内的要因)によるものではなく、外的要因に起因する音であり、辺野喜方言特有の音変化ではないため本論考では特に取り扱わない。ここで問題となるのは、なぜワ行音が/gwa/に相当するのかということである。ワ行音に着目すると辺野喜方言では/gwa/音以外に対応する語例も見出せる。

ワ行子音/gw/の形成過程についてみると、辺野喜方言のワ行子音には/b//g w//w/の3音が現れる。中でも/gw/は辺野喜方言特有の音である。この音はどのように形成されたのか、またこの音は琉球方言のワ行子音を考察する上で何を示唆しているのかについて考察する。その手順としては先ず、南琉球方言に属すほとんどの方言で観察される/w/と辺野喜方言の/gw/の関係をみていき、次に先島方言で観察される/b/と辺野喜方言の/gw/の関係について考察した。

次に/gw/と/w/との関係を見た場合、中央語において上代ではすでにワ行子音は/w/であり、なおかつそれが現在まで継続されている。また院政期の『類聚名義抄』に見られる「ゲウ」の変化したものではなく[so:gwatsu](正月)のように漢語からの借用である。一方、現在の琉球方言でもそのほとんどの方言がワ行子音は

/w/である。

「ワ」に対応する/g/に着目すると、辺野喜方言では90歳から80歳までの女性で/gwa/が見られ、70歳になると男女ともに/wa/となっている。このことから90歳から70歳までの世代では/gwa/が古く/wa/が新しいといえる。

これらを踏まえて新垣（1998）では上記のような全琉球方言におけるワ行子音の変化について述べた。新垣（1998）で特記すべきは、これまでは各地域ごとの音韻対応としてのワ行子音であったバリエーションをひとつの音変化の道筋として示した点にある。

4. 内間説

内間(2004)で注目すべきは、奄美・沖縄と宮古・八重山のワ行子音の変化を分けて次のように考察した点にある。

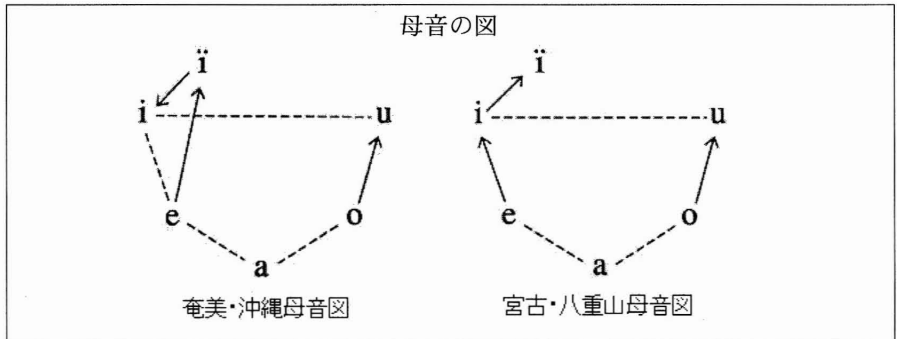
w > b	宮古・八重山
w > b, gw, g > w	沖縄本島

4.1 琉球方言における母音の変化

琉球方言のワ行子音に見られるバリエーションを解明するには、その後続する母音が重要な鍵になることが指摘されている。まとめて示すと次のようになる。

- 1) 琉球方言のワ行子音に見られるバリエーションを解明するには、その後続する母音が重要である。
- 2) 母音の形成過程が奄美・沖縄と宮古・八重山では異なるので、その両者を分けて考察する必要がある。

以上の2点である。それぞれの母音変化については内間（2004）、遡っては中本



(1976) に詳しいので参照されたい。

5母音>3母音>5母音(新[e][o]の成立に伴う)と奄美・沖縄の[w]>[b][gw][g]>[w]の変化には連関性があると考え次のように述べている。

5母音から3母音への変化に伴って、沖縄本島方言にも、[w]>[b]の変化の兆しはあったものと考えられる。その痕跡が沖縄本島北部方言に属す国頭村奥方言や、辺野喜方言にみられる[b]音である(内間・新垣2000)。

奥方言 [bi:] (藺草)、[bi:n](坐る)

辺野喜方言 [bi:] (藺草)、[bi:n](坐る)

用例は少ないが、ここでは[i]と結合したもののみが残っていて、音環境がはっきりしている。(中略) W行の[b]音について段ごとに資料を整理してみる。

	語彙	奥方言	辺野喜方言
ワ	私	wan	wan gwan
ヰ	藺草(ヰ)	bi:	bi:
エ	男(エけり)	?unga	?unga
ヲ	夫(をと)	?utu	?utu

(内間・新垣2000を基に筆者作成)

W行子音の[b]音化が狭母音化に伴って、起こった言語現象であることを示している。名護市にも[bi:mata] (為又) という地名があるが、これもW行子音の[b]音化した痕跡である。また沖縄国頭村辺土名に[bi:n] (坐る)、奄美諸島の中の与論島立長方言でも[bjun] (坐る)、[bi:] (坐れ) のように現れる(中本1976)。

内間(2004)では[-i]のような環境に限って[b]音が残存していると述べ、母音環境にこだわりながら[b]音残存の要因を探ることに力が注がれている。

また、内間(2004)では[d]と[j]との関係について考察がなされている。その連関性については、古くは村山(1981)にも見られる指摘であるが、W行の[b][w]の関係が即、ヤ行の[d][j]と関係していくという点はやや論に飛躍が感じられる。両氏の頭の中では豊富な調査資料と経験からそのような論を導き出したものと考えられるが、その変化の詳細な説明が必要であるように感じる。

5. ワ行子音の変遷を検証する

『図説琉球語辞典』（中本1981）に基づいてワ行子音の変遷を検証する。中本（1981）にはワ行子音を含む語彙が収められている。琉球方言全体のワ行子音の有様を考察する場合、中本（1981）の研究は大変有効であると考えられる。その理由としては、1つ目には全琉球を網羅した広範囲におよぶ研究であること、2つ目は語彙をその系統に分類し分布を示していること。3つ目は、1人の調査者による記述研究で、資料が統一していることが理由である。本書を引用しながら、ワ行子音の変遷過程について観察する。

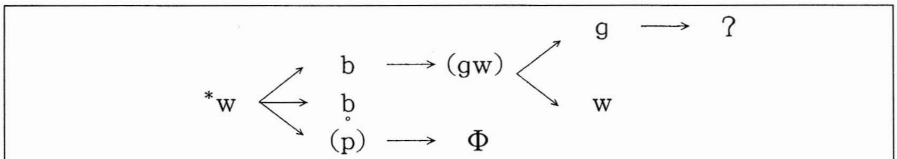
まず、中本（1981）には、ワ行子音を含む語彙が見られる。「5.1夫」「5.2女きょうだい」「5.3腹」「5.4砂糖きび」「5.5藺」「5.6縁」「5.7女」「5.8男」「5.9男きょうだい」である。ここで着目すべき点は次のとおりである。①無声子音[b]が現れる。②[g]が現れる。③[b][p]が現れる。④①から③が現れない。以上のような視点で中本（1981）のワ行子音に対応する語彙の分布地図を観察していく。

5.1 「夫」

全琉球方言の「夫」を表す語は「ヲット」に対応する。次のような語例がみられる。ウトゥ系には[wutu:] [wu:tu] [wutu] [wuttu] [ʔuto:] [ʔutu] [ʔutu]、グトゥ系には[gutu]、ブトゥ系には[butu] [butu] [budu] [bikidun] [bikidumu]が見られる。詳細については巻末の地図1を参照されたい。なお地図1は中本（1981 p. 97）を基に筆者が作成した。

「夫」という語彙の分布を観察してみるとワ行子音の部分に①無声子音[b]が現れる。②[g]が現れる。これらを踏まえて全琉球におけるその子音の変化を図示すると図1のようになる。

図1「夫」（ヲット）



以下中本（1981 p.96）を引用する。

夫を表す琉球語は、ウトゥ系・グトゥ系・ブトゥ系であり、単一語形の

*wopitoにさかのぼる。奄美大島北部はウウトウ wutu、南部はウウトウ wutu:である。喜界島と徳之島はwutuとウトウ?utuがある。沖永良部島と与論島は圧倒的にwutuである。沖縄北部は?utu、ウトウ?utu:が多いが、沖縄中南部ではwutu、?utuが多い。久高島・与路島・喜界島花良治ではグトウgutuとなる。

南琉球では語頭音がバ行音になるのが特色である。宮古がブトウ butuで、八重山はbutuのほかに、ブドウ buduのように語中子音が有声化する形がある。(中略) 夫を表す琉球語は次のような変化過程を経ている。

*wopito	→woφutu	→wu:tu	→wutu
	→wopjito	→wupjtu	→wuttu
*bupito	→boφuto	→bu:tu	→butu
			→budu

南琉球のワ行b音は次に続く母音の音声環境に左右されることなく、常にbなので、wより古形とみることが可能だ。

以上のように述べられている。中本(1981)では、おおよそワ行子音の変化についてb系統とw系統の音変化にわけている。またその変化としては(b>w)と捉えているといえる。しかし中本(1981)ではこれだけに留まり、研究の対象としてワ行子音にはあまり目が向けられていない。

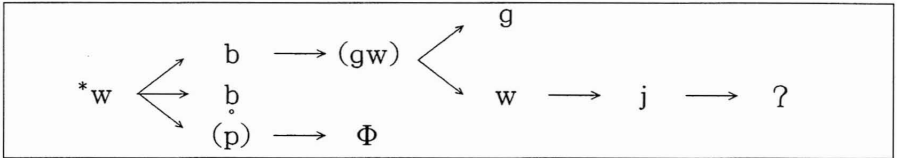
5.2 「女きょうだい」

全琉球の「女きょうだい」を表す語は「ヲナリ」に対応する。これについてみていく。この語は、ヲナリ系とブナリ系の2つに分類される。まず、ヲナリ系に所属する語には、[wunar] [wonari] [wunar/wonar] [wuna:r] [wunai:] [wunai] [ʔunai] [jinai] [φunai] [wuner] [gunai] [gunari] [φinai]がある。また、ブナリ系に所属する語には次のような語のパイエーションがみられる。[bunari] [bunari] [bunaru] [bunai] [bunari] [bunaʔi] [ɸunaʔi] [bunai]。詳細については巻末の地図2を参照されたい。なお地図2は中本(1981 p. 111)による。

この語の語形のバリエーションで注目すべきは、屋慶名の[φunai]と粟国の[φinai]、喜界島阿伝と久高島の[gunai]、喜界島花良治の[gunari]、そして宮古大神島の[ɸunaʔi]である。

喜界島阿伝と久高島の[gunai]、喜界島花良治の[gunari]については、新垣(1998)で述べた変化の流れで説明できる。またここでも前述の「夫」の分布のように①無声子音[b]が現れる。②[g]が現れる。これらを踏まえて全琉球におけるその子音の変化を図示すると図2のようになる。

図2 「女きょうだい」(ヲナリ)



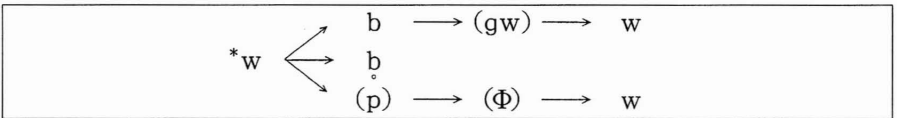
ここでは、屋慶名の[ɸunai]と粟国の[ɸinai]について、上記の変化の中にどのように位置づけられるのかについて考える必要がある。

そして、本稿で、これまでに述べてきたように宮古大神島の[bunaʔi]は全琉球方言のワ行子音の大きな流れを考える上で重要である。

5.3 「腹」

全琉球方言の「腹」は「ワタ」に対応する。これを表す語としては、ワタ系の[wa(:)ta:] [wata] [watta:]とバタ系の[bata] [badal] [bata]が見られる。それらの分布を観察してみるとワタ系は奄美・沖縄に分布し、バタ系は宮古・八重山に分布していることがわかる。「腹」で注目すべき点は、ただ1点である。宮古の大神島方言では[bata]となっており①無声子音[b]が現れる。この点は前述の「夫」「女きょうだい」の分布と同様である。しかしワ行子音に対応する[g]は現れない。詳細については巻末の地図3を参照されたい。なお地図3は中本(1981 p.67)による。

図3 「腹」(ワタ)



5.4 「男」

全琉球の「男」を表す語は「エケリ」に対応する。これについてみていく。この語は、キキガ系、ビキドモ系、ビンガ系の3つに分類される。キキガ系には次

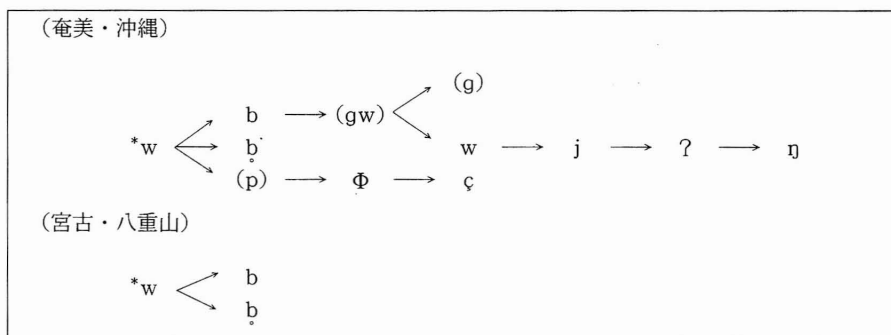
のような語形がみられる。語例は以下の通りである。

[wɔŋgial][jɪŋga:] [jɪŋga] [jɛŋga] [wiŋŋal] [jɪŋŋal] [wuiŋa] [ɸuiŋa] [ʔuŋŋa] [ʔuɸuŋŋa]
 [wuɕiŋa] [ʔuŋŋwa] [jiɕiŋa] [wikiŋa][jikiŋa:] [jiki(:)ŋa] [ʔike:ŋa:] [ʔikiŋa] [jukigal]
 [ʔukigal] [ŋkigal] [ɕikigal]。次にビキドモ系では [bikidumu] [bikidum] [bikidun]
 [bikindun] [bigidun] [bi:do:] [bidun] [bidumu] [biɕidun] [ʔikidum] である。ピンガ系には[biŋga]がみられる。

キキガ系の語例は奄美・沖縄にみられ、ビキドモ系は宮古・八重山にみられ、その分布の境界は明確である。ここで注目すべきは屋敷名に[ɕikigal]がみられることである。

しかし与那国島ではピンガ系[biŋga]がみられ、これはむしろキキガ系と同様にエケリに対応するものと考えられる。なぜ与那国のみ飛び火的に見られるのかについての考察は別の機会に譲る。ここでは上述の「腹」同様に「①無声子音[b]が現れる」点が重要である。上記の資料を基に「男」という語彙のワ行子音の変化を示すと次のようになる。詳細については巻末の地図4を参照されたい。なお地図4は中本（1981 p. 89）を基に作成した。

図4 「男」（エケリ）



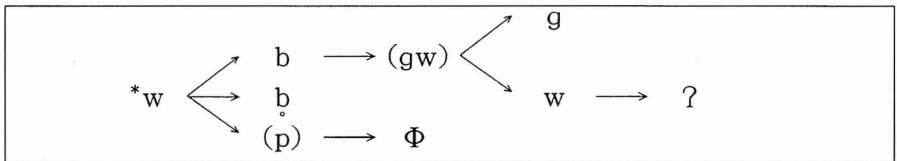
5.5 「砂糖きび」

全琉球の「砂糖きび」を表す語は「ヲギ」に対応する。この語は、ヲギ系とスジャ系の2つに分類される。まずヲギ系に所属する語としては次のような語例がみられる。

[wugi:] [wu:gi(:)] [wu:k] [ʔu:gi:] [ʔugi:] [ʔu:gi] [ʔugi] [wu:dzi] [wudzi:] [wu:dzi]

[wudʒi] [ʔu:dʒi] [ʔudʒi] [wuni] [ʔu:ni] [gudʒi] [gudʒi] [gwi] [guni] [ʔu(:)dʒi] [ʔugi]
 [bu:ɡʷi] [bu:dʒi] [pu:ki]. 次にスジャ系には次のような語例が見られる。[sɪddʒa]
 [ʃindʒa] [ʃindʒa:] [kittsa] [sittsa] [ʔamasina] [ʔamada] [ʃira]. ここで着目すべき
 はワ行子音に対応する音に[p]が現れることである。これまでみてきた[b]も現れ
 ており、有声無声の対立する音声の両方が見られる点は着目すべきである（以下
 ③[b][p]が現れる、とする）。またあわせて②[g]が現れる。詳細については巻末の
 地図5を参照されたい。なお地図5は中本（1981 p. 195）による。

図5 「砂糖きび」(ヲギ[荻])



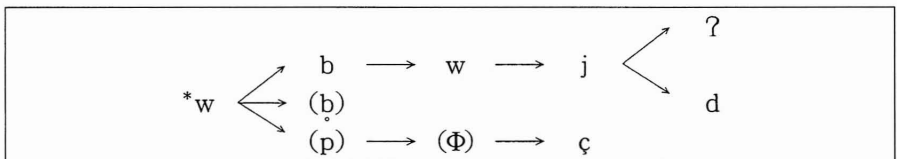
5.6 「蘭」

全琉球の蘭草を表す「蘭」は「𪛗」に対応する。この語は、𪛗一系とビー系、
 ビゴイ系、カマ系の4つに分類される。まず、ここで注意すべきは、その対応語
 である。𪛗一系、ビー系は「蘭」に対応する。しかしビゴイ系は「備後蘭」に対
 応するので、ここでは基本的には考察対象とはしない。あわせてカマ系について
 中本（1981）では対応語が示されていないので、ここでは考察対象とはしない。

この語で考察の対象として注目すべきは、ワ行子音に対応する音に「③[b][p]が
 現れる」点である。詳細については図6を参照されたい。なお巻末の地図6は中
 本（1981 p. 199）による。

これらの語形を一つの変化の流れで捉えた場合には、次のような一連の流れが考えられる。

図6 「蘭」(𪛗)



また上記の音声変化を踏まえて、中本（1981）の「蘭」の分類にみられるような
 与那国島の[dɪ:]は𪛗一系ではなく、ビー系に分類すべきであろう。与那国島の[j]
 >[d]への変化を考えれば、与那国島方言における「蘭草」の変化は[wi:]>[bi:]>

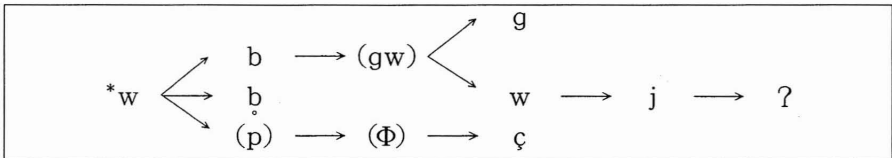
[wi:]>[ji:]>[di:]の変化を経たと考えなければならない。よって、与那国島の[di:]はキ一系ではなく、ピー系に分類すべきであると考えられる。

中本(1976 pp.201,205)ではヤ行音に対応する音声、ワ行子音の対応音声について述べられているが「蘭」についての用例が示されていないため、ワ行子音「キ」は[bi][ɲ]に対応する旨が述べられている。本書の段階でもワ行子音の音声のバリエーションについては特に記述がみられない。

5.7 「縁」

全琉球方言の「縁」を表す語は「エン」に対応する。次のような語例が見られる。エン系には[jen]、キ一系には[ji:n][jin][ʔi:n][ʔin][jinu]、ヒン系には[çin]、イキム系には[jim]、ギン系には[gin]がある。ここで注目すべきはワ行子音に「② [g]が現れる」点である。詳細は巻末の地図7を参照されたい。これらの変化の流れは図7のようである。

図7 「縁」(エン)



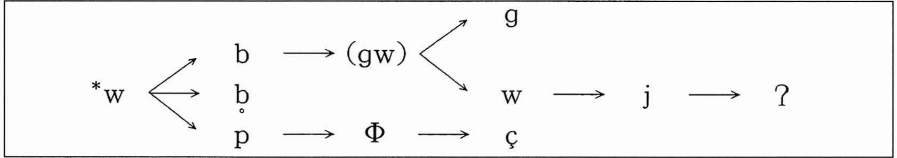
5.8 「女」

全琉球の「女」を表す語は「ヲナゴ」に対応する。これについてみていく。この語は、ヲナゴ系、キナグ系、ミドモ系、ミヌガ系の4つに分類される。しかし本稿の目的はワ行子音に対応する音声のバリエーションについて観察することなので、その対応語形がミドモ、ミヌガとなるミドモ系、ミヌガ系はここでは考察の対象外とする。まず、ヲナゴ系に所属する語としては次のような例が見られる。
[wonaɡu] [wunaɡu:] [wunaɡu] [ʔunaɡu] [ɸunaɡu] [wonak] [wuna(:)k] [juna(:)k] [ʔuna(:)k] [wunaŋu] [wunan] [ɡunau]。

次にキナグ系の音声バリエーションについてみていく。語例は以下に示すとおりである [winagu] [junagu] [jinagu] [jina:ɡu] [ʔinaɡu:] [juna:ɡu] [ʔinaɡu] [jinau] [junagu] [çinaɡu] [na:ɡu]。上記に示した「女」を表す語例はすべて奄美・沖縄に

のみ見られる例である。ここでも注目すべきは、上述の「縁」と同様「②[g]が現れる」点である。詳細については地図8を参照されたい。なお地図8は中本（1981 p. 91）による。変化の流れを示せば図8のようになる。

図8「女」（ヲナゴ）



奄美・沖縄の「女」を表す語は、(w>j>?i(?u)>脱落)あるいは(w>Φ>ç>脱落)のような変化を経ているものと考えられる。

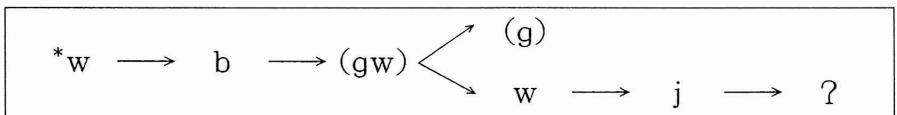
つまり奄美・沖縄方言でよく観察される「女」を表す語は、ヲナゴ系、オナグ系と分類するよりも中本自身が中本（1981p.90）で述べるように[*wominago]に遡れるのであれば、その変化はワ行子音の一連の流れの中で説明してもよいものであると考える。

5.9 「男きようだい」

全琉球の「男きようだい」を表す語彙は「エケリ」に対応する。この語は、オキー系とビギリ系の2つに分類される。まず、オキー系に所属する語としては、[wiki:] [ʔwiki:] [jiki:] [ʔiki:] [juki:] [ʔuki:] [wuki:] [jiçiri] [jiçir] [wuç:bi] [wubil] [ʔuçi:] [je:ri] [ji:ri] [jiri] [je:r] [ji:i] [ji:] [wui] [jexëri]がある。また、ビギリ系に所属する語には [bikil] [bikir] [bugirî] [bigiru] [bikizî] [biki:] [bigi] [biçirî]がある。なお図9は中本（1981 p. 109）による。

ここでは、オキー系に注目する必要がある。ビギリ系の母音がすべて[i]であるのに対して、オキー系では[i][u][e]といったバラエティーがみられる。そこで、ここでは母音も含めてその変化を示す。詳細については巻末の地図9を参照されたい。

図9「男きようだい」（エケリ）



男きょうだいを表す語はキキ系・ビキリ系であり、単一語系の*wekeriに遡る。その語形は、キキ、イキヒリ、ビキリである。キキは沖縄地域に分布し、[wiki:] [jiki:] [juki:] などの形がある。イキヒリは奄美地域にあり、語中のkがhのように[ç]音を留めるが、周辺では、喜界島・徳之島のイキーリ [ji:ri] 沖永良部島のイキー [ji:] のようにçが脱落している。与論島は奄美大島同様çを留め、ウウヒービ [wuçi:bi] (*彘けり部)である。南琉球になるとワ行頭音がbであるから、宮古でビキズ [bikizi] 八重山では [bigiri]となる。

6. 地名に見られるワ行子音変遷の痕跡

6.1. 「保栄茂」の事例

ここでは「保栄茂(びん)」が語る琉球方言の音韻変化について考察する。沖縄本島の南部に「保栄茂」という地域がある。当該地域は現在「ビン」と呼ばれている。地名を考察対象とする場合には、後の当て字なのか否かということに留意する必要があることは周知の通りである。このことをまず断わってから、沖縄南部の地名である「保栄茂」について考察していく。

『沖縄古語大辞典』には「保栄茂」の表記として「ぼへむ」と立項されている。これをI.P.A.表記してみると①[bohemu]となる。しかし、漢字表記をそのままI.P.A.表記してみると②[howemo]となる。まず、琉球方言全体の高母音化が当該地域にも起こっていたことを考えると③[huwimu]となる。①で問題となるのは語頭の[bo] [he]の部分である。琉球方言全体の高母音化を考えれば語末の母音[mu]は妥当である。しかし、語中の[he]については「栄」に[he]と当てるのは、過剰類推であると考えられる。おそらく[we]までにしか遡ることはできないし、[we]は、[we]→[wi]への変化を起こしていったと考えられる。

次に語頭の[bo]であるが、これは非常に重要な事例であると考えられる。先にも述べたように漢字表記の[h]が現在発音されているような[b]に変化すること難しい。語頭の「保」はかつて[p]と発音されていたであろう。このことは全琉球方言のワ行子音の変化をみると容易に想像できる。しかし[p]が[b]に変化するの容易ではない。この変化が実現されるには両者が混同する状況が必要である。つまり、これまでに見てきたワ行の変遷と、この「保栄茂」の音変化は決して無関係ではないと考えられる。ワ行の[b]とかつては[p]であった現在のワ行とが[b]の

無性化という[p]とも[b]とも聞こえるような音声を介在して混同したものと考えられる。以下に「保栄茂」の音変化の過程を述べる。

[表2]		
①	[p o w e m o]	ハ行子音 [p] 無声子音 [b] 音化
②	[b̥ o w e m o]	中間母音の高母音化
③	[b̥ u w i m u]	両唇接近音の統合
④	[b̥ u i m u]	末尾母音の脱落
⑤	[b̥ u i m]	母音融合
⑥	[b̥ i ɾ]	母音の共通語
⑦	[b̥ i ɾ]	

以上[表2]のような音韻変化を経て「保栄茂」は「ホエモ」から「ピン」へと変化したものと考えられる。

6.2. 「斎場御獄」の事例

ここではまず「斎場御獄」について概観しておく。沖縄全域には、集落や航海の無事を見守る神などが祭られている聖地が多く見られる。これらは「御獄（うたき）」と呼ばれている。その中でも「斎場御獄（せいふあーうたき）」は、琉球王国で最も格式の高い聖地とされていた。琉球王国時代、斎場御獄では、神女でもっとも位の高い聞得大君（きこえおおきみ）の就任儀式「お新下り（おあらおり）」や、国の五穀豊穡や平和を願い、国王自らがお参りする「東御廻り（あがりうまい）」など、国の大切な神事が行われていた。当時は国王や聞得大君などのごく限られた人しか入ることができなかったが、現在では一般にも開放され「拝み」をする人が絶えず訪れる御獄である。

その「斎場御獄」は「せーふあうたき」のように発音される。これを音声字母で記すならば[se:ɸautaki]となろうか。この対応語は[saibautaki]または

[faibautaki]であると考えられる。ここではサ行子音の音価までは確定できない。まず母音の融合により[se:bautaki]または[fe:bautaki]となる。次に語中の[b]音が無性化し、音価として[p]と非常に近い音声に変化したものと考えられる。その結果、無性化した[b]は[p]と混同を起こし[p]へと変化した。そして語中の[p]はもとのとのハ行子音とともに[p]>[ɸ]の変化を経て[se:ɸautaki]と発音されるに至ったと考えられる。

[表 3]		
①	[sa i ba utaki]	連母音の融合
	↓	
②	[fe: ba utaki]	無声子音[b]音化
	↓	
③	[fe: b̥a utaki]	無声子音[b]の[p]音化
	↓	
④	[fe: pa utaki]	語中[p]の[ɸ]音化
	↓	
⑤	fe: ɸa utaki]	

7. まとめ

本稿で明らかにした点は次のとおりである。

1) 無声子音[b]音の設定

名嘉真(1992)の示すようにb音の変化はハ行転呼音と無関係ではにだろう。「保栄茂」の事例をみても[bowemo]の古形が[howemo]であるとは考えにくい。有声音[b]と対立する音素として、やはり平行的に[p]を立てる必要がある。しかし[p]が即[b]に変化したのではなく、むしろ内間(2004)が示す例のように[b] (bの無声化:pともbとも聞こえる音声で咽頭に緊張はない)を設定する必要がある。加えて言えば内間(2004)では八重山方言の一部にしか認められていない[b]であるが、「保栄茂」の事例から考えれば、沖縄本島にも[b]が存在していた可能性がある。つまり全琉球において、かつてはワ行子音に対応する[b]が存在していた可能性がある。

2) 「ブナリ系」と「ヲナリ系」は同系統、しかし母音形成過程は異質

中本 (1981) では「女きょうだい」を表す語を次のように分類している。

女きょうだいを表す語は*wonariにさかのぼり、語頭音によってヲナリ系とブナリ系に別れる。

しかし「女きょうだい」を表す語も上記に述べてきた語彙と同様にw>bへの変化を辿ったものと考えられ、決して系統的に異なるものというわけではない。ただし、奄美・沖縄と宮古・八重山のb音は母音の形成が大きく異なるため、その形成過程で伴う母音(結びつきやすい)が異なるため、現在のb音残存の状況が異なるものと考えられる。内間 (2004) で示されるように、奄美・沖縄のb音がwに変化したのに対して、宮古・八重山のb音が変化を遅らせた要因に母音の形成過程と変化があげられよう。

「女きょうだい」を表す語のワ行子音はひとつの古形に遡れるであろうし「ヲナリ系」と「ブナリ系」に分かれるのではなく、かつては「ヲナリ」が全琉球に分布していたであろうし、次に「ブナリ」に変化し、母音形成の違いにより、子音bと母音との結びつき、そして定着度合いに差が生じ、現在のように奄美・沖縄は様々な子音バリエーションを生じ、宮古・八重山にはb音が定着、残存したのと考えられる。つまり「女きょうだい」を表す「ブナリ系」「ヲナリ系」はワ行子音の変遷という一つの流れで説明できるのである。

3) 村山説と名嘉真説の考察対象

上記で述べたように村山説と名嘉真説は相反するワ行子音の変化過程を示していた。琉球方言のワ行子音の変化を村山は(w>b)としたし、名嘉真は(b>w)とした。一見、相反する変化のように見えるが、これは一連の流れの中のある一部分をそれぞれがそれぞれの立場から検証した結果であると考えられる。ワ行子音の概要を大まかに示せば(w>b>w)という変化を辿る。村山は前半部分の(w>b)を、そして名嘉真は後半部分の(b>w)を切り取り、それぞれが検証し考察を進めていたということであろう。そのため、それぞれの検証結果は決して間違っただけのものではないが、しかし相反する結論が導き出された。これらの事実を踏まえれば、琉球方言のワ行子音の変化は例えば「X→Y」のような単純な変化ではないということが考えられる。琉球方言のワ行子音の変化はかなり複雑な変

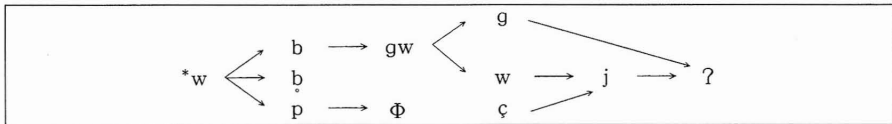
化を重ねてwやbといった音声を基盤に一見、行きつ戻りつのような状況であるが、いくつかの音変化を繰り返しながら現在のワ行子音[w]に至っているものと考えられる。大きな一つの変遷の流れを示すことができてもそれは、ひとつの大きな道筋に過ぎず、すべての事象を網羅しきれていることにはならない。それが琉球方言研究の醍醐味でもあり、難しいところでもある。今後はそれぞれの地域のワ行子音がどのようなパターンの変化を辿ってきたのか音韻対応や変化を丁寧に見極めながら考察していく必要がある。

4) 「保栄茂」の音韻変化を踏まえると、かつて沖縄本島にも無声子音[b]が存在していたことが推察される。琉球方言のワ行子音の一部は古くは無声子音[b]であったと考えられる。この無声子音[b]を設定しなければ、かつて[p]であったであろう「保栄茂」の「保」のような音韻変化を解くことはできない。このことに辿り着くには内間(2004)の示す祖内の資料が大きくヒントとなったことを記しておく。「保栄茂」の事例を含めて全琉球方言のワ行子音の変遷をまとめると新垣(1998)のワ行子音の変遷の一部は改める必要がある。

5) 「斎場御獄」の音韻変化を踏まえると、かつて沖縄本島にも無声子音[b]が存在していたことが推察される。琉球方言のワ行子音の一部は古くは無声子音[b]であったと考えられる。この無声子音[b]を設定しなければ、かつてバ行の子音[b]であったであろう「斎場御獄」の「場」の[b]>[p]>[ϕ]のような音韻変化を解くことはできない。

「保栄茂」の事例ならびに「斎場御獄」の事例を含めて全琉球方言のワ行子音の変遷をまとめると新垣(1998)のワ行子音の変遷の一部は改める必要がある。

図10 「全琉球におけるワ行子音の変遷」新垣(2010)



6) 全琉球におけるワ行子音の[b]音残存を考察する上では、奄美・沖縄と宮古・八重山方言の母音の変化を考察すれば、内間(2004)が示すようにワ行子音の変化も両者を分けて考察を進めるほうがより、その詳細を知ることができる。しか

しながら大きな流れでその変化を考えるならば「保栄茂」や「斎場御獄」にみられるように、少なくとも現在には宮古・八重山にしか現れない無声子音[b]が沖縄本島にも存在していた可能性がある。無声子音[b]を設定すれば[p]への変化、また[p]から[ɸ]への変化、さらに[c̥]への変化も比較的スムーズに説明することができる。

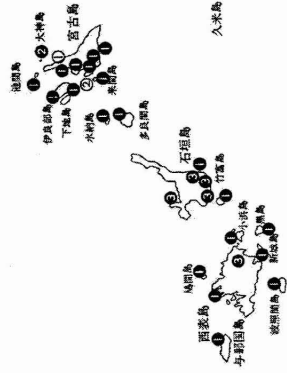
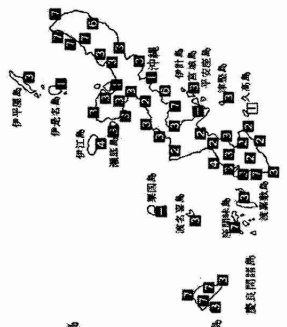
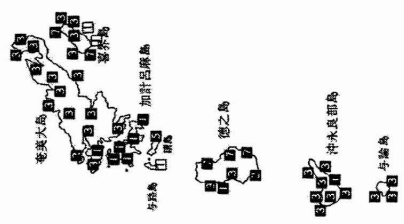
以上が本稿明らかにした点である。今後はさらに各ワ行子音残存の要因を丁寧に検証していきたいと考えている。

夫(フット)

- 分布語
- ウトウ系
- 1 ウトウー wutu:
 - 2 ウー トウ wutu
 - 3 ウトウ wutu
 - 4 ウットウ wuttu
 - 5 ウトー ?uto:
 - 6 ウトウー ?utu:
 - 7 ウトウ ?utu
 - 8 フトウ Φutu

- グトウ系
- 1 グトウ gutu

- フトウ系
- 1 フトウ butu
 - 2 フフトウ futu
 - 3 フドゥ butu
 - ① ビキドゥン bikidun
 - ② ビキドゥム bikidumu



地図 1

女きょうだい(ヲナリ)

- ▲ブナル bunar
- △ブナ× buna^xi
- △ブナ× bunaxⁱ
- △ブナイ bunai

ブナリ系

- ▲ブナリ bunari
- ▲ブナリイ bunariⁱ
- ▲ブナル bunaru
- ▲ブナリ bunali

- ⑧ⁱキナイ jinai
- ⑨フナイ funai
- ⑩クウネー wune:
- グナイ gunai
- ②グナリ gunari
- ③フィナイ pinai

分布語

ヲナリ系

- ①クウナリ wunari
- ②ヲナリ wonari
- ③クウナル wunar, wonar
- ④クウナル wunar
- ⑤クウナイ wunai:
- ⑥クウナイ wunai
- ⑦ウナイ ?unai



腹(ワタ)

バタ系

- ① バタ bata
 ② バダ bada
 ③ ツバタ ɸata

分布語

ワタ系

- ワ(-)ター wa(:)ta:
 ② ワタ wata
 ③ ワッター watta:



地図 4

男(アケリ)

ビンガ系

▲ビンガ bigga

ビキドモ系

■ビキドゥム(ヌ) bikidumu(nu)

②ビキドゥム bikidum

③ビキドゥン bikidun

④ビキンドゥン bikindun

⑤ビギドゥン bigidun

⑥ビードゥン bi:doʔ

⑦ビドゥン bidun

⑧ビドゥム bidumu

⑨ビヒドゥン biçidun

□フビキドゥム ʔbikidum

⑩ウングワ ʔuggwa

⑪イキヒガ jiçiga

①キキガ wikiga

②イキキガー jikiga:

③イキキ(-)ガ jiki(:)ga

④イケーガー ʔike:ga:

⑤イキガ ʔikiga

⑥ユキガ jukiga

⑦ウキガ ʔukiga

⑧ンキガ ʔkiga

⑨ヒキガ çikiga

分布語

キキガ系

①キンガ wigga

②イキンガー jingga:

③イキング jinga

④キェンガ jengga

⑤キング wigga

⑥イキンガ jingga

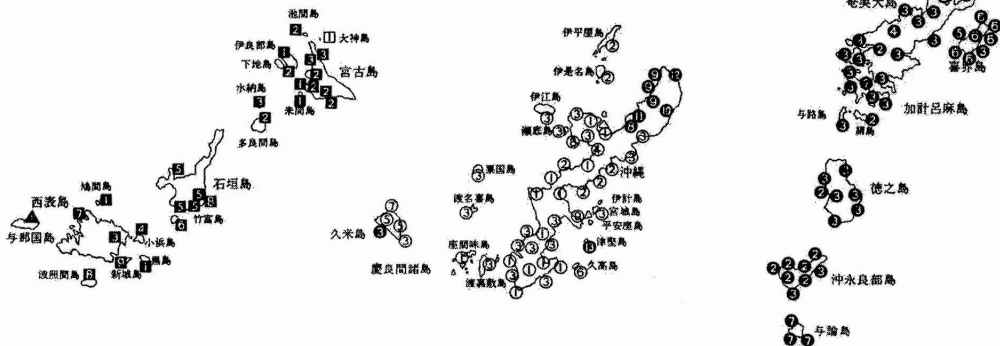
⑦アウイガ wuiga

⑧フィガ ʔuiga

⑨ウング ʔugga

⑩ウフンガ ʔuʔugga

⑪ウヒガ wuçiga



砂糖きび【荻(ヲギ)】

スジャ系

- ① シイッジャ siddʒa
- ② シンザ findza
- ③ シンジャー findʒa:
- ④ キツァ kittsa
- ⑤ シィツァ sīttsa
- ⑥ アマシヒナ zamasip̄na
- ⑦ アマダ zamada
- ⑧ シラ fira

- ☐ グジ gudʒi
- ☐ グイ gui
- ☐ グニ guni
- 合フ(-)ジ Φu(:)dʒi
- 合フギ Φugi
- ▲ ブーギッ bu:ɡʲi
- ▲ ブージィ bu:dʒi
- ▲ ブーキィ pu:ki

- ☐ ウウジー wu:dʒi:
- ☐ ウウジ wudʒi:
- ☐ ウウジ wu:dʒi
- ☐ ウウジ wudʒi
- ☐ ウージ zu:dʒi
- ☐ ウウジ zu:dʒi
- ☐ ウウニ wuni
- ☐ ウーニ zu:ni

分布語

ヲギ系

- ウウギー wugi:
- ウウギ(-) wu:gi(:)
- ウウギ wugi
- ウウッ wu:k
- ウーギー zu:gi:
- ウギー zu:gi:
- ウーギ zu:gi
- ウギ zu:gi



地図 6

蘭(中)

カマ系
▲カハマ kaḩa

ビゴイ系
①ピグ pigu
②ビゴイ bigoi
③ビーグー bigu:
④ビッグ b^higu
⑤ビッーン b^hi:n

ビー系
□ビー bi:
⊠ビッー b^hi:

分布語
キー系
■キー wi:
⊡キーグ wi:gu
⊢イキー ji:
⊣イー zi:
⊤ヒー çì:
⊥ディー di:



縁(エン)

ギン系

▲ ギン gin

キム系

▲^イキム jim

ヒン系

▲ ヒン çin

キーン系

①^イキーン jin②^イキン jin

③イー ʔin

④イン ʔin

①^イキヌ jinu

分布語

エン系

■ キエン jen



地図 8

女(ヲナゴ)

ミノカ系

▲ミノカ minuqa

ミドモ系

- 11 ミドゥムヌ midumunu
- 2 ミドゥム midumu
- 3 ミドゥム midum
- 4 ミードゥン midun
- 5 ミンドゥン mindun
- 6 ミードゥン midoĩ
- 7 ミツドゥム miđum
- 8 ミドゥン midun

キナグ系

- ① キナグ winagu
- ② ⁱキナグー jinagu:
- ③ ⁱキナグ jinagu
- ④ ⁱキナグ jina:gu
- ⑤ イナグー zinagu:
- ⑥ ⁱキナグー jina:gu:
- ⑦ イナグ zinagu
- ⑧ ⁱキナウ jinau
- ⑨ ユナグ junagu
- ⑩ ヒナグ ċinagu
- ⑪ ナグ na:gu

分布語

ヲナゴ系

- ① ヲナグ wonagu
- ② クウナグー wunagu:
- ③ クウナグ wunagu
- ④ ウナグ ŋunagu
- ⑤ フナグ Funagu
- ⑥ ヲナク wonak
- ⑦ クウナ(-)ク wuna(:)k
- ⑧ ユナク juna:k
- ⑨ ウナク ŋuna:k
- ⑩ クウナグ* wunagu
- ⑪ クウナン wunan
- ⑫ グナウ gunau



男きょうだい(アケリ)

ビキリ系

- ▲ビキリ bikil
- ▲ビキル bikir
- ▲ビギリイ bigiri
- ▲ビギル bigiru
- ▼ビキヌ biki'ŋ
- ▼ビキー biki:
- ▼ビギ bigi
- ▼ビヒリイ biçiri

- ⑩イキーイ jii
- ⑪イキー ji:
- ⑫クウイ wui
- ⑬キエヘリ jexëri

- ②イキヒル jiçir
- ③クウビービ wuçi:bi
- ④クウイビ wuibi
- ⑤ウヒー zuçi:
- ⑥キエーリ je:ri
- ⑦イキーリ jiri
- ⑧イキリ jiri
- ⑨キエール je:r

分布語

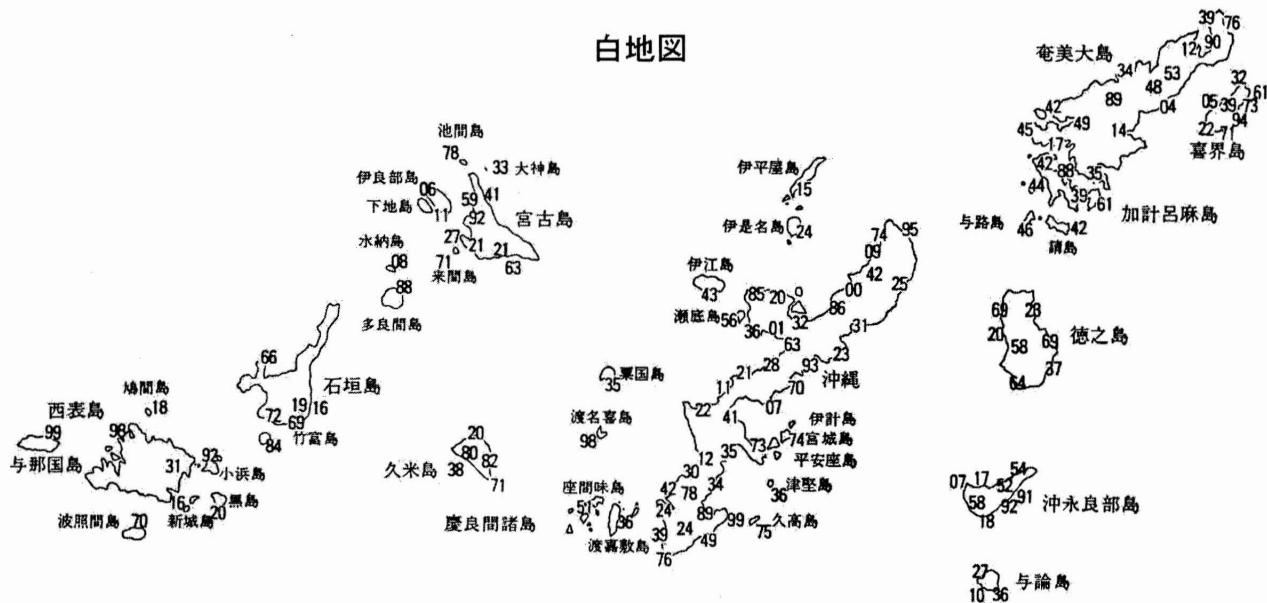
キキー系

- ①キキー wiki:
- ②フキキー ?wiki:
- ③イキキー jiki:
- ④イキー ziki:
- ⑤ユキー juki:
- ⑥ウキー ?uki:
- ⑦クウキー wuki:
- ⑧イキヒリ jiçiri



地図10

白地図



地点一覧表（中本（1981 pp. 459-463）を基に筆者作成*地名の後の番号は地図上の番号を示す）

奄美		志戸桶	61	名護	63	瀬底	56	友利	63
奄美大島		塩道	73	屋部	01	粟国島		砂川	21
佐仁	39	徳之島		呉我	32	前浜	35	来間島	
用	76	松原	69	平良	1	渡名喜島		来間	71
根瀬部	34	山	23	嘉陽	23	渡名喜	98	多良間島	
名瀬	48	平土野	58	辺野古	93	慶良間諸島		仲筋	88
恩勝	89	天城	20	名嘉真	28	座間味島	51	水納島	
赤木名	90	井之川	69	恩納	21	渡嘉敷島	36	水納	08
竜郷	12	亀津	37	谷茶	11	久米島		八重山	
浦上	53	沖永良部島		石川	41	宇江城	20	石垣島	
久志	42	国頭	54	伊良皆	22	比嘉	82	石垣	72
屋鈍	45	手々知名	91	惣慶	70	鳥島	38	川平	66
久慈大浜	17	新城	58	金武	07	西銘	80	大浜	69
湯湾	49	瀬名	52	屋慶名	73	島尻	71	宮良	19
西仲間	14	田皆	07	与儀	35	久高島		白保	16
小湊	04	上城	17	大山	30	久高	75	西表島	
古仁屋	35	瀬利覚	92	野嵩	12	宮城島		祖納	98
加計呂麻島		知名	18	津覇	34	池味	74	古見	31
薩川	42	与論島		首里	78	津堅島		鳩間島	
須子茂	44	茶花	27	那覇	42	津堅	36	鳩間	18
瀬相	88	立長	10	新里	89	宮古		小浜島	
押角	39	麦屋	36	久手堅	99	池間島		小浜	92
諸鈍	61	沖繩		与根	24	池間	78	黒島	
与論島		沖繩本島		志多伯	24	大神島		東筋	20
与路	46	奥	95	糸満	39	大神	33	竹富島	
請島		宇嘉	74	喜屋武	76	伊良部島		仲筋	84
請阿室	42	佐手	09	奥武	49	伊良部	11	新城島	
喜界島		辺土名	42	伊平屋島		長浜	06	上地	16
大朝戸	39	大兼久	00	我喜屋	15	宮古島		波照間島	
湾	05	屋古	86	伊是名島		大浦	41	前	70
中里	22	安波	25	伊是名島	24	平良（市）	92	与那国島	
阿伝	94	具志堅	85	伊江島		西原	59	祖納	99
花良治	71	仲宗根	20	東江	43	与那覇	27		
小野津	32	崎本部	36	瀬底島		上地	21		

参考文献

- ジョアン・ロドリゲス原著・土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂
- 平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京堂
- 外間守善（1971）『沖縄の言語史』法政大学出版局
- 中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 法政大学沖縄文化研究所（1977）『琉球の方言 宮古大神島』
- 村山七郎（1981）『琉球語の秘密』筑摩書房
- 中本正智（1981）『図説琉球語辞典』金鶏社
- 法政大学沖縄文化研究所（1985）『久高島調査報告書』久高島調査委員会編
- 外間守善（1986）『沖縄の歴史と文化』中公新書
- 平山輝男編著（1988）『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社
- 上村幸雄（1992）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典第4巻世界言語編下-2』三省堂
- 久野マリ子他（1992）『南琉球新城島の方言』國學院大學日本文化研究所
- 名嘉真三成（1992）『琉球方言の古層』第一書房
- 大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫（1998）[宮古大神島方言の音声一単語と文法]平成8・9年度科学研究（課題番号08610520）成果刊行書
- 野原三義（1998）『新編 琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所
- 新垣公弥子（1998）「辺野喜方言におけるワ行子音の構造」『国語学会平成十年度秋季大会予稿集』国語学会
- 内間直仁・新垣公弥子（2000）『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- 新垣公弥子（2000）『琉球方言の記述・比較研究—音韻、活用、助詞—（本編）』（学位請求論文 pp. 169, 383）
- 上村幸雄（2000）「八重山方言から東北方言まで—日本語の方言形成過程について—」『宮良當壯記念論集』宮良當壯生誕百年記念事業期成会
- 柴田武（2001）「九州・沖縄方言の2つの音声変化」『国語学』第53巻1号 国語学会
- 松森晶子（2001）「完了した音変化の進行過程推定の一方法—琉球における狭母音化と軟口蓋無声破裂音の摩擦音化—」『音声研究』第五巻第二号 日本音声学会

- 内間直仁 (2002) 『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に—』平成12～13年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 内間直仁 (2004) 「古代日本語のワ行子音の[b]音化について—宮古・八重山方言を中心に—」『国語学』第55巻2号 日本語学会
- 新垣公弥子 (2009) 「琉球方言におけるワ行子音の変遷」『沖縄学』第12号 沖縄学研究所

[謝辞]

本稿は2009年3月に発行された「琉球方言におけるワ行子音の変遷」『沖縄学』第12号を基に、沖縄文化協会2009年度公開研究発表会（於：沖縄県立芸術大学 2009.7.19）にて「琉球方言におけるワ行子音の変遷についての一考察」として口頭で発表した内容に加筆修正しまとめたものである。

研究会では参加なされた研究員の皆様から多くの質問を頂戴した。それに応えたものが本稿である。記して御礼申し上げたい。